

の隠蔽が放置されているのである。欺瞞的なリーダーシップによって、若年者の精神的な発達 は停止 (developmental arrest) し、現実検討能力の低下した状態 (poor reality testing) は一層悪化する。このような方法により、簡単にカルト信者に改宗を求めることができるのである (Pruyser 1977, 1978)。

カルトの分析を行なう場合、精神科医は、各カルト集団に特徴的な個人的体験および特殊な体験について認識する必要がある。これらの経験が、カルト集団のものの見方および客観的な態度に、影響を及ぼしているからである。とくに、宗教思想と関連した神経症のおよび精神病的経験を過去に有しているかどうかが重要である。宗教集団というものは、特異な性質 (idiosyncratic) を持つことが証明されており、場合によっては、精神病的異常 (psychotic distortions) を呈する集団も存在する (GAP Report 67, 1968)。ごく一部のカルト信者、元信者 (ex-members)、信者関係者が、精神科医に対して支援を求めてくるが、精神科医は、これらの人々の要求に対応しつつ、慎重な態度をとることが重要である。カルトの実態に足を踏み入れる精神科医はほとんどいないし、大多数のカルト信者は、精神科医を拒絶するものである。精神科医は内省することによって、カルトに対抗する感情の存在を認識するのである。カルト集団は、独自の「ポップ」("pop") 心理学と治療的方法を用いることにより、このような対立感情を扇動しているのである。対立感情については、Kilbourne & Richardson (1984) が指摘している。

文献

- Appel W: *Cults in America: Programmed for Paradise*. New York, Holt, Rinehart, and Winston, 1983
- Cushman P: *The politics of vulnerability*. *Psychohistory Review* 12(4): 5-17, 1984
- Engler JH: *Vicissitudes of the self according to psychoanalysis and Buddhism: a spectrum model of object relations development*. *Psychoanalysis and Contemporary Thought* 6(1): 29-72, 1983
- Group for the Advancement of Psychiatry: *The Psychotic Function of Religion in Mental Illness and Health, formulated by the Committee on Psychiatry and Religion*, 1968
- Kaslow F, Sussman MB (eds.): *Cults and Family*. New York, Haworth Press (Marriage and Family Review, Vol14, No3/4), 1982
- Kilbourne B, Richardson JT: *Psychotherapy and New Religion in a Pluralistic Society*. *American Psychologist* 3:237-251, 198
- Pruyser PW: *The Seamy Side of Current Religious Beliefs*. *Bulletin of the Menninger Clinic* 41:329-348, 1977

第3章 アメリカにおけるカルト

カルトが発生した社会文化的背景について解明する目的で、アメリカにおけるカルトの経緯について要約する。西洋世界全体において、類似した集団が形成されている。個別の心理学的要因については、後の章で言及する。

啓蒙思潮 (the Enlightenment) が主流をなした18世紀は、楽天主義 (optimistic belief) の時代であった。合理主義思想 (rational thought) によって、あらゆる知識を獲得することができると考えられていた。各種の集団の中でも、宗教的寛容性 (religious toleration) を理想とする友愛主義組織であるフリーメーソン団 (Freemasonry) と、組織化された宗教を否定する思想体系としての理神論 (Deism) が、知識者の間で支持されていた。これらの知識者には、アメリカの建国の父とされる人々も含まれていた。外向的 (extroverted) かつ合理主義的 (rational) な性質を有する集団であったため、これらの思想集団が、カルト集団とみなされることはなかった。

19世紀の宗教復興 (religious revival) の時代に、カルトが発生した。これらの中で最も有名なものが、末日聖徒イエスキリスト教会 (モルモン教会) (The Church of Jesus Christ of the Latter Day saints - the Mormons) である。同教会は、宗教的啓示 (religious revelations) を受けた Joseph Smith が、1820年代に、ニューヨークで起こしたものである。この集団は、アメリカ各地を転々とし、最終的には、1847年に、アメリカフロンティアのユタ州に定住した。Smith は、イリノイ州で殺害されたため、Brigham Young が後継者となった。フロンティア社会では、厳格な規制が比較的少なく、このことが同集団の拡大と組織化を促進する要因となった。その後、同集団はさらに普及して、社会的に主流をなす宗教 (a mainstream religion) として受け入れられるようになった。

コミュニストは、指導者である John Humphrey Noyes の教義にしたがって生活した。New Zion の時代の到来を提唱する教義は、マタイによる福音書第22章30節 (「復活の時には、彼らはめとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。」日本聖書協会) に基づき、信者は、コミュニオンが所有する財産の中で生活し、独占的な関係を否定するものであった。

西部開拓に伴い、インディアンの生活は、苦境に陥った。政府によって居留地 (reservations) での生活を余儀なくされ、キリスト教の伝道 (missionaries) によって、インディアン固有の信仰は、危機に曝されることとなった。主要な食糧源であった野牛 (the buffalo) が消滅し、インディアン文化は荒廃するに至った。このような状況下において、2つの大きな宗教運動が起こった：ゴーストダンス (the Ghost Dance) とネイティブ・アメリカン・チャーチ (the

Native American Church) であった。

ゴーストダンスは、1889年に、Wovoka という名前の北パイユート族が起こした至福時代の到来を信じる宗派であった (a millennial movement)。「ダンスによって、大地が急速に復活し、生者が、復活した死者と再会し、狩猟によって大量の獲物が確保され、白人による支配からインディアン社会が解放される」と信じられた (Halperin 1983)。その後、同宗派は消滅した。1890年には、Wounded Knee 大虐殺が発生して組織が弱体化し、至福のあがない (millennial redemption) のために定められた通り、1891年の春に、完全に消滅したのである。

ペヨーテ (peyote) [ウバタマサポテンから採る幻覚剤] を儀式に用いるネイティブ・アメリカン・チャーチは、カイオワ族、コマンチ族、ナバホ族に普及し始めた宗派であった。日常生活で直面する問題を解決するためには、ペヨーテを食べることによって、洞察力を獲得することができると提唱した。この方法は共通の儀式として利用され、各種のインディアン種族を統合するのに役立った。

ハワイ諸島においても、同様の環境からカルトが発生した。外国からの植民者が増加すると、原住民の生活は、変化して悲劇的な様相を呈するようになった。免疫のない病気の蔓延により、原住民の人口は、1778年には、30万人であったが、19世紀末までには、2万8千人に激減してしまった。従来の宗教体系の代わりとして、会衆派教会 (the Congregational Church) が布教活動を展開し、伝道師の子孫らがビジネス・コミュニティーを支配するようになった。伝道活動に伴い、ハワイの言語は変更を余儀なくされ、新しい言語で印刷されるようになった。君主制 (monarchy) が打倒され、ハワイ原住民の自立 (autonomy) を目指した活動に対して、最後の一撃が加えられた。

1850年代初期には、Kaona のハワイ土着のカルト集団が、消滅の一途を辿っていた伝統的な生活様式の復活を目指して活動を起こした。Joseph Kaona は、ハワイ下院議員で地方治安判事を務める原住民であったが、現世の終わりによって第二の世界の到来を信じるミラー派 (the Millerites) の千年至福説 (millennial teachings) について学んだ。Kaona は、自らが神であると信じ、啓示 (visions) を経験した。

「Kaona は、太平洋地域固有の予言者の末裔であり、我々にはもはや十分な時間が残されていないと認識するようになった。また、予言者の啓示により、統一的な運動 (universal convulsion) を行なうことが、白人のいない従来の世界の復活につながるものと考えられるようになった」 (Daws 1969)。1868年までには、Kaona には数百人の信者がいた。これらの人々は財産を放棄し、白い衣服に身を包み「赤い灰」 ("Lehuula") とよばれる土地に定住した。そこで、信者らは、歌い、踊り、祈り、世界の終わりを待った。

信者らの居住地の所有者が、力によって土地を取り戻そうとしたとき、Kaonites の信者らは、警察隊を導いた保安官を殺害したために逮捕された。Kaona は、刑務所に送られ、カルト集団は解散したMary Baker Eddy は、『科学と健康』 ("Science and Health") を著した後、1875年に、クリスチャン・サイエンス (Christian Science) を設立した。Eddy は、神が法律体系によって物質世界を支配していると考えていた。また、罪と同様に、病気も、正しい (proper) 態度によって克服されるものと考えていた。この考え方は、科学的教義に対立するものであったが、プロテスタントの思想が、「当時の重大な不安に対するある種の解決策として、役立っていた」 (Albanese 1981)。

シェーカー教 (the Shakers) (正式名称; キリストの再臨を信じる者の統一教会 the United Society of Believers in Christ's Second Appearing) の教祖である Mother Ann Lee は、信者によってキリストの再臨として崇められていた。同宗派にはダンスの儀式があり、これにちなんでシェーカー教という一般的な名称で呼ばれている。宗教的な熱情によってもたらされる身体の震えが、舞踏として知られている。神には、男女両方の性質があり、性は悪徳とみなされていた。同宗派は、コミュニオンを形成して生活し、信者は独身者 (celibacy) であった。

アメリカ社会では、黒人は差別され冷遇されていた。このような状況に対抗する目的で、2つの黒人運動が展開された。Father Divine's Peace Mission は、ペンテコスタ派、ポジティブ思考、世俗的プラグマティズムを融合した宗派である。当時のアメリカでは、都市化の中で心理的葛藤に直面していた数百人の黒人たちにとって、同宗派は情動的なサポート・システム (emotional support system) となっていた。神を人格化することに賛同し、同宗派に帰依することにより、最低の費用で、食物、衣服、住宅が提供された。さらに、同宗派は、貧困者の市民権の擁護と福祉の整備にも積極的に取り組んだ。

Black Jews は、1919年に、ハーレムで発生した。エチオピアでユダヤ教を信じるファラシャ人 (the Falashas) の子孫であると主張する同宗派では、黒人を意味する「ニグロ」という表現は使わないこととし、キリスト教は異端であるとみなしていた。ヘブライ語が神聖な伝統的言語であるとし、ユダヤ教の食生活の規則を実行した。南部バプテスト教会、ペンテコステ派の礼拝と比較すると、Black Jews の礼拝は、厳粛であり、控えめであった。その後、同宗派は、北上するが、その前に南部バプテスト教会およびペンテコステ派と融合することとなった。歴史家の George Simpson は、次のように述べている。「黒人であるという汚名からの解放、白人による拒絶からの解放をめざし、Black Jews は、歴史、文化、宗教を形成したのである」 (Simpson 1978)。

2つの世界大戦の間には、カルトの普及は認められなかった。当時の厳しい経済状態が、あらゆる世代、あらゆる階層の人々に影を落とし、家族を共通の価値観で結束させていた。これとは対称的に、ベトナム戦争当時の葛藤状況においては、とくに若者の間に、道徳的腐敗 (demoralization) や疎外感 (alienation) が蔓延し、新しい社会組織が多数誕生した。これらの組織としては、各種の信仰カルト集団に加え、ヒッピー、ドラッグ・カルチャー、エンカウンターグループ等も挙げられる。

近代のコミュニケーション技術の進歩により、アメリカの若者たちは、アメリカ文化以外の地域の宗教に、精神的な示唆 (inspiration) を求めるようになった。多数の若者たちが、インドや日本の宗教に関心を持っていた。東洋の正統派宗教における思想と信仰活動は、断片的に輸入され、新しい宗教の教義として統一されていった。1960年代以降においては、宗教組織に類似したグループが次々と形成されていった。

インド人のグルである Maharishi mahesh Yogi が、弟子のために提唱した超越瞑想法 (Transcendental Meditation; TM) は、カルトとして組織された。宗教的な「超越」状態を達成するために、「マントラ」を唱える修行が行なわれている。その後、TM は、カルト集団から外部社会にも影響を及ぼすようになり、100万人のアメリカ人を対象とした正式な研修活動においても教示されている。このような活動には、宗教的要素はなく、身体および精神的リラクゼーションを得る目的で、TM が導入されている。

Sri Hans Ji Maharaj は、1960年に、Divine Light Mission を起こし、精神的覚醒 (spiritual enlightenment) を目的として、ヨガの修行を取り入れた。Ji Maharaj は、同宗派が設立されて、翌年に死亡し、その子息である8歳の Maharaj Ji によって、受け継がれた。ただし、指導者の交代に伴って、信仰が快楽主義的傾向を呈するようになり、母親の苦情によって、同宗派はインドに戻って消滅した。

Church of Scientology は、L. Ron Hubbard が起こした宗派である。Hubbard は、その著書である『ダイアナティックス』 ("Dianetics") で広く知られている。サイエントロジーは、東洋と西洋の信仰を混合し、自己認識によって、「自己の内部に存在する生来の善良性」を表現することができることを指導した。

クリシュナ意識国際協会あるいはISKON (Hare Krishnas : ハーレ・クリシュナ) は、A. C. Bhaktivedanta Swami Prabhupada によって、設立された。この集団は、1965年に、登場した。現在でも活動を継続している集団であり、信者は、禁欲的な生活様式の中で暮らしている。入浴儀式、粘土による身体への刻印、神像崇拝、経典を唱えることなどが規則として定められている。バガヴァッド・ギーターの研

究および改宗には長時間が必要である。

禅宗と日蓮正宗は、日本古来の伝統的仏教宗派である。これらは、日本と同様の宗派としてアメリカに入ってきたが、アメリカ国内での信仰活動および組織化が進むにつれて、カルト類似 (cultlike) の性質が強調されるようになった。日蓮正宗は、多数の信者を獲得し、アメリカ人の日常生活の中に重要な影響を及ぼしつつ浸透している。豊富な資金力に基づく洗練された活動は、アメリカの公立小学校を対象に展開されている。

1978年、ガイアナのジョーンズタウンで、人民寺院 (the people's Temple) の集団自殺および殺人事件 (mass suicide and murder) が発生した。この悲惨な事件は、カルトへの参加によって発生する恐怖の縮図である。ジョーンズの信者の多くは、自己の意志の病的な喪失状態に陥り、ほとんど抵抗することなくあるいは完全に無抵抗な状態で、自殺したりあるいは他者の殺害を行なったのである。この事件をきっかけとして、カルト指導者と信者の心理に対する関心が高まるようになった。

数え切れない数のカルト集団が存在するが、本書では、アメリカで普及した一部のカルト集団についてのみ言及した。これらのカルト間における活動、信条、普及についての違いが、ある程度、解明されたはずである。一部のカルトは、誕生後、数年の以内に消滅し、他のカルトは普及している。さらに、モルモン教やクリスチャン・サイエンス等をはじめとする一部のカルトに至っては、宗教界の主流派に組み込まれるようになったのである。カルトの普及性 (popularity) とその持続性 (durability) については、次章で述べることにする。

文献

- Albanese C: American Religions and Religion. Belmont, CA, Wadsworth Publishing, 1981
- Bainbridge W, Stark R: Cult formation: three compatible models. *Sociological Analysis* 40(4): 283, 1979
- Billias G, Grob G: American History. New York, Free Press, 1971
- Clausen H: Masons Who Helped Shape the Nation. San Diego, CA, Neyensch Printers, 1976
- Cornault F: Les Frances des Sectes. Paris, Tchou, 1978
- Daws G: Shoal of Time. New York, NY, Macmillan Company, 1969
- Downey W: Admitted to the Mysteries. New York, Exposition Press, 1970
- Ellwood R: Religious and Spiritual Groups in Modern America, Englewood Cliffs, NJ, Prentice-Hall, 1973
- Enroth R: Youth, Brainwashing, and the Extremist Cults. Grand Rapids, MI, Zondervan Corp, 1977
- Galanter M: Charismatic religious sects and psychiatry. *American Journal of Psychiatry* 139:1539-1548, 1982

- Gaustad E (ed): A Documentary History of Religion in America, Vol II. Grand Rapids, MI, William Eerdman Publishing Co, 1982
- Halperin A (ed): Psychodynamic Perspectives of Religion, Sect, and Cult. New York, John Wright Publishing Co, 1983
- Hoffer E: The True Believer: Thoughts on the Nature of Mass Movements. New York, New American Library, 1951
- Jones B: Freemason's Book of the Royal Arch. London, George C. Harrup & Co. 1965
- Kaplan H, Sadock B (eds.): Comprehensive Textbook of Psychiatry V. Baltimore, MD, Williams & Wilkins, 1990
- Kaslow F, Sussman M (eds.): Cults and the Family. New York, Haworth Press, 1982
- Kodama M: Kaona Insurrection of 1868: Its Background and Analysis. Unpublished Undergraduate Paper. University of Hawaii Library, 1968
- Koch A: Cults and Mental Health: Clinical Conclusions. Canadian Journal of Psychiatry 26:534-539, 1981
- Ling T: A History of Religion East and West. London, Macmillan Press, 1979
- Morais H: Deism in 18th Century America. New York, Columbia Press, 1934
- McDermott JF Jr, et al (eds.): People and Cultures. Honolulu, HI, University Press of Hawaii, 1980
- Melton JG, Moore R: The Cult Experience. New York, Pilgrim Press, 1982
- Miller E: Authoritarianism: The American Cults and Their Intellectual Antecedents. University of Hawaii Library, 1979
- Mosely J: A Cultural History of Religion in America. Connecticut, Greenwood Press, 1981
- Pavlos A: The Cult Experience. Connecticut, Greenwood Press, 1982
- Prabhupada AC: Bhaktivedanta, Bhagavad Gita As It Is. New York, The Bhaktivedanta Book Trust, 1973
- Ross M: Clinical Profiles of Hari Krishna Devotees. American Journal of Psychiatry 140:416-429, 1983
- Simpson G: Black Religions in the New World. New York, Columbia University Press, 1978
- The Holy Bible, King James Version. New York, Abroadale Press

第4章 カルト指導者

1972年、35歳のアメリカ人が、インドのアーシュラマから帰国した。名前はBabaといい、ニューヨーク市の公園のベンチに毎日座るようになった。この男は、幸福な家庭生活を経験したことはなかった：Babaが、21歳の時、父親は母親を殺害して自害した。Baba自身は、30歳の時に、妻と子供の元から立ち去った。

その後、4年間に約30名の信者を獲得し、これら

の集団が自らを「家族」(The Family)とよぶようになったことは興味深い事実であった(Deutsch 1975)。信者の近所のアパートで菜食主義者の食事が提供され、Babaと大多数の信者は、一緒に屋根の上で眠った。Babaは、身ぶり手振りだけで意志を伝え、第一の弟子であるSidが、他者のための通訳の役割を果たしていた。昼間には、Babaは、教義を通行人に語りかけていた。

Babaが、公園のベンチに座るようになって5ヶ月後、「家族」は古いバスを1台購入し、近くの州の丘陵に移動した。そこで、約100人ほどの信者が農場コミュニティを形成した。信者は、入信を強制されるわけではなく、自由に入出入りしていた。Babaは、野望、性欲、所有欲、罪の意識に対する執着を取り除くことの重要性を説いていた。

Babaの行動は、奇妙さ(bizarre)を増して、サディスティックになり、独裁的傾向(domineering)を示すようになった。Babaは、弟子を頻りに叩き、一部の女性信者に対して、性的虐待を加えた。1975年までには、Babaの身ぶり手振りは、一層奇妙なものとなり、最も高位の信者でさえも理解することはできなくなっていた。babaは、絶えず眉をひそめ(grimacing)ていた。悪魔の化身となってしまう、信者の増加は望まないようになったBabaは、以前のインド人指導者に面会した。その後、このコミュニティは解散し、Babaの行方については知られていない。

1965年、67歳のインド人のA. C. Bhaktivedanta Swami Prabhupadaが、インドからニューヨークにやってきた。製薬会社の理事を退職したPrabhupadaは、ポケットに6ドルだけ持っていた。その後、Prabhupadaは、クリシュナ意識国際協会あるいはISKONを設立したのである。インドでは、Prabhupadaはクリシュナ・セクトの信者であり、"Back to Godhead"という雑誌を編集していた。58歳の時、妻、5人の子供、仕事のすべてを放棄してヒンドゥー教の僧侶となった。その9年後、Prabhupadaはニューヨークに来て、自分の教義に基づく布教活動を開始したのである。

イーストサイド下町の店頭で、伝道活動を開始し、無料で菜食主義者の食物を提供した。これと同時に、人格化したクリシュナ神であるロード・クリシュナについての教えを説教した。インド宗教の古典とされるバガヴァッド・ギーターをテキストとして使いながら、布教活動を行なった。初期の信者は、ほとんどがヒッピー文化に染まった若者たちであった。

通常、ISKONは、ハーレ・クリシュナとして知られている。ISKONの教えは、詩人のAlan Ginsberg、ビートルズのGeorge Harrison、ロックグループのThe Grateful Deadらに影響を与え、広く世間に知られるようになって、急速に普及した。オレンジ色の袈裟を着て、頭髪を剃りあげた信者が、都会の街路

でハーレ・クリシュナを吟唱し、花束と交換で募金を集めている姿が頻繁に見かけられるようになり、この集団は一層広く知られるようになった。今日、この集団の活動は定着し、1977年に、Swami Prabhupada が死去した後も、布教活動が展開されている。教祖は生前に、指導者を任命して布教活動を監視する制度を築いたが、このような教祖の洞察力によって、同集団が成功したといえるのである。現在、ヨーロッパ、オーストラリア、ニュージーランドの約40カ所に、寺院が建立されている。

これらの例は、いずれもインド宗教に由来するものであったが、カルトの2つの対称的な結末を示している。まず、Baba には、精神病的な崩壊があり、その結果として、カルトは解散することとなった。次いで、Prabhupada の場合、死去するまで、集団の布教活動を監督していた。また、教祖の死後にも教団が発展できるように、綿密な計画を立てていた。カルトの普及には多数の要因が関与しているが、指導者の性質が、特に重要な要因となっている。(Deutsch 1980)。

指導者の性質 (Figure)

カルト指導者に関する研究は、あまり行われていない。信者を対象とした研究が中心となっている。元来、典型的なカルト指導者の場合、自己を精神科医の分析対象とすることには消極的である。カルト集団が公開している指導者像によれば、温厚であると同時に非凡な指導者としてのイメージを与え、その実際的人格 (actual personality) は、隠蔽されている。しかしながら、カルト集団が提供しているイメージに基づき、指導者が理想としている自画像 (ideal self-image) を推測することは可能である。指導者のある種の性質については典型的なものであり、信者に浸透している神秘像に反映されている。例えば、英雄 (The Hero)、アウトサイダー (The Outsider)、ナルシスト (The Narcissist)、カリスマ的存在 (The Charismatic Figure)、企業家 (The Entrepreneur) が挙げられる。いずれの指導者の場合においても、これらの性質が複数組み合わせられているのである。我々が取り上げたカルト指導者の多くは、男性であるため、下記の説明では、カルト指導者に対して、男性代名詞を使うこととする。

英雄：Joseph Campbell の『多くの顔を持つ英雄』 ("The Hero With a Thousand Faces") (Campbell 1968) において、英雄としてのカルト指導者が描かれている。英雄は、危機的時代あるいは大混乱の時代に誕生するが、誕生の事実が、世の中に知られる場合は稀である。指導者の到来は、予言される。通常、一方の親が聖者であり、他方の親は平民である。人生の初期において、非凡な能力を示すものである。例えば、巨大な力、知恵や悟り等の極端な早熟性

(extreme precocity) が認められる。これらの能力は、知らないうちに身につくものである。その後、何かの出来事が起こり、英雄は、自分が普通ではないことに気づき、選ばれたものとしての天職に就く (the calling to a chosen mission) ことになる。当初、自分の特別な能力について意識しない場合もあるが、最終的には、天職に就き、苦悩や危険に遭遇するのである。

アウトサイダー：一般に、指導者というものは、主流派との関係においてアウトサイダーの立場にある。指導者は、一般に孤独であり、批判の対象とされるように感じている。そのため、自分の生涯をその償いに費やしている。絶対服従を誓う信者を獲得することにより、独自の世界を築き、初めて最高のインサイダーとしての地位を手に入れるのである。世間とは敵対関係にある。というのは、世間に対して恐怖感を抱き、これを遠ざける一方で、操作 (manipulate) あるいは「救済」 ("save") しようとしているからである。したがって、指導者は、自己を迫害された救済者 (the persecuted savior) であるとみなすようになるのである。

ナルシスト：「指導者 (leader) は、上位者 (master) の真似をすることにより、ヌミノーゼ的な聖なる自己としてのアイデンティティを獲得することができるのである。この場合、その自己とは、最も純粹かつ具体的形式である」(Satinover 1980)。指導者は、子供の自己愛の世界に生きているのである。子供の世界は、壮大な空想と万能力に満たされ、限界や欲求不満によって変化することはない。カルト内部でどんなに苦しい困難に遭遇しようとも、完全を目指すプロセスにおいて、妨げとなる障害が解消されるようになると、指導者は、信者以外のもの (outside) は不完全で啓蒙されていない人間 (flaws) であるとみなすのである。指導者にとって典型的であるといえるのが、自分の核家族の元を去って天職を追求する指導者には、外部の世界 (external world) は布教活動を展開するのに適していると考えられる。

カリスマ的指導者：Max Weber は、カリスマを次のように定義している。「ある種の人格を意味し、この人格によって一般の人々とは区別され、超自然的、超人間的な性格を付与された特別な人として扱われる。このような人には、少なくとも特別に例外的な性質または特質が備わっている」(Weber 1922。1947年に英訳)。カルトと指導者の両方が、互いを強く必要としている。指導者は、その信奉者から託されたあらゆる理想化 (idealization) および投影 (projection) を実現しなければならないのである。指導者は、特別な存在 (uniqueness) であり、天職 (calling) を与えられた者としての自己を認識し、選ばれた者であるということ、他人に納得させる能力について確信している。このことは、信奉者が指導者に託した理想を実現するために、不可欠である。

後述するが、信奉者は、神聖な指導者を、至急、必要としているのである。

企業家：カルトが、小さな単位以上に拡大した場合、指導者は、ある意味では、企業家であるにちがいない。普及しつつあるカルトは、新しい信者 (new recruits) と資金を確保しなければならないため、マーケティングの側面が必要である。成功した大規模カルト (successful large cult) の指導者の多くは、企業家としての業績がある。組織の拡大に伴い、信頼された信者が、マーケティングの側面を支援する場合もある。

カルトの指導者が、これらの性質を併せもたない場合、指導者と弟子という個人的な関係に依存した小規模集団 (small band) を超える大規模な集団へと拡大する可能性は少ない。通常、このようなカルトは、指導者の死によってカルトも消滅する。

文鮮明師 (The Reverend Sun Myung Moon)

本章では、1例を挙げて説明する。近代「新・宗教」 ("new religion") の最も成功した指導者の一人について、その経歴を詳細に検討する：「文鮮明師」 (Bromley and Shupe 1976)。世界キリスト教統一神霊協会 (Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity) (略称：統一教会) (Unification Church) は、安定した組織となり、広く普及していることは事実である。過去15年間にわたって、信者、怒りに満ちた保護者、マインドコントロールを解こうとする者 (deprogrammer; [注：脱洗脳専門家]) が集まって、激しい対立が続いている。反カルト論者 (anti-cultist) の攻撃の的であったが、統一教会の権利は、アメリカ市民自由連合 (American Civil Liberties Union) とアメリカ教会協会 (National Council of Churches) によって擁護されている。アメリカの統一協会の場合、1960年には、完全な信徒 (full-time member) が約20人であったが、1980年には、6000人まで増加した。現在、アメリカの統一協会の株式資産は、約2億ドルに値すると推測されている。

文鮮明師は、日本による嚴重な占領下の1920年に、北朝鮮で誕生した。地方で暮らす家族の8人兄弟の5番目として生まれた。10歳の時、家族が長老派協会 (Presbyterian church) のペンテコステ派の信者となった。子供時代の文鮮明は、キリストの悲劇を聞いて泣き、自然との一体感を体験し、大人が子供を虐待することに怒りを覚えたといわれている。

文鮮明は、16歳の時の体験を、次のように述べている。祈りの中で出現したキリストは、神が文鮮明を選び、キリストがやり残した仕事を完成するように神が命じていることを告げた。すなわち、神の国を地上に実現するように、神から命じられたのである。その後、9年間にわたって、文鮮明は、宗教上

の真実について熱心に研究した。この研究期間中に、「永遠の悪徳」 ("cosmic evil") に遭遇し、キリスト、モーゼ、仏陀と会話した。

文鮮明は、村の伝統的な儒教の学校で教育を受け、ソウルの高等学校に進んだ。1941年には、日本の大学で電気工学を学び、2年後に、韓国に帰国して電気工学間系の職業に就いた。その1年後、韓国の独立運動を支援した罪によって、4ヶ月間、投獄された。

この時、文鮮明は、技師、政治的活動家、宗教指導者のいずれかの職業を選択すべき時が来たことを実感した。1945年、25歳の時に、宗教指導者になることを決意した。その後、北朝鮮のピョンヤンで、牧師としての活動を開始した。妻と2ヶ月の子供の元を去り、ピョンヤンで、独立した教会を作り上げた。文鮮明の教会は、支配政党の共産党 (日本は敗戦していた) と正統派キリスト教の両方と対立した。このため、2回投獄されて拷問にかけられた。1950年、文鮮明は、国連軍によって強制労働収容施設から解放されると、2人の信者 (友人の一人は足を骨折していた) と、600マイル南方の釜山に向かって出発した。自転車に乗って釜山に到着した。文鮮明は、あらかじめ釜山に集合するように信者に命令していた。釜山の難民キャンプで、教会を設立した。文鮮明は、港湾労働者として働いて、自らの生活を支えていた。

1954年、文鮮明は、ソウルに自分の教会を設立し、現在の名称を使うようになり、最初の『神の原理』 ("The Divine Principle") を発行した。その翌年には、教会内部における姦淫および乱交の疑いによって、ふたたび投獄された。教会側は、徴兵回避に対する根拠のない処罰であると発表した。処罰は撤回され、文鮮明は3ヶ月後に解放された。その後まもなく、教会は根拠地である Cheong Prabong に移動した。

統一教会が普及し始めたのは、1950年代後期になってからのことである。1958年には、最初の布教団が日本に派遣され、1959年には、Yung Don Kim 博士がアメリカに派遣された。同女史は、ソウル大学の比較宗教学の教授を務めていたが、統一教会に入信したことによって、1955年、大学から解雇された。同女史の一連の神秘的体験は、カナダの大学院生活の期間中に起こっていた。その他の信者らも、アメリカやヨーロッパに派遣された；当初の布教活動は質素なものであった。複数の小規模集団は自助グループとして残り、各グループが地域の指導者としての性質を持つようになった。

日本のコミュニオンでは、新しい信者を対象とした体系的な研修プログラム (systematic training program) が設定され、大変な成功を収めた。ただし、統一教会と対立する人々は、このようなプログラムを洗脳活動 (brainwashing) であると批判した。同

様の計画はアメリカにも広がった。1965年、サンフランシスコに、統一教会のコミュニオンが作られた。

西洋の統一教会運動においては、文鮮明自身が、積極的に推進役を務めた。世界ツアーを3回実施した後、1971年には、アメリカに戻り、アメリカこそ神の国の建設に積極的な役割を果たすべきであることを主張した。文鮮明は、異なった種類の集団を組み合わせ、指導者らの再研修や異動を行ない、信者には、長時間、街頭に立って募金活動を行なうように指示した。大都市でのリバイバル集会には、文鮮明自身が積極的に姿を見せた。

組織が拡大するに伴い、組織の運営に多額の費用が必要となった。マデイソン・スクエア・ガーデンでの大集会を含む8都市ツアーに要した費用総額は、100万ドルと伝えられている。大規模な募金活動 (large-scale fund raising) が、重要な仕事となった。信者が集団となって、蠟燭、ピーナツ、花束を売り、熱心な募金活動を行なった。このような活動が成功し、統一教会は、莫大な財産を獲得し、教会活動の費用と販売活動の費用に充てられた。

こうして統一教会は普及し、有名な組織としての地位を築いた。文鮮明は、宗教活動に不満を抱いていた最初の妻とは離婚した。その後、1960年、再婚した。文鮮明と2度目の妻は、信者の精神的な親 (spiritual parent) として認められている。文鮮明は、結婚に対して強い影響力を及ぼしていた。信者には合同結婚式 (mass wedding) を挙げるように指導していた。1975年には、最大規模の合同結婚式が、アメリカで行なわれ、文鮮明が1800組の結婚式を主催した。結婚式を重要視することにより、教会内部の結束を強化することが可能であった。さらに、統一教会は、一貫して、大家族主義 (large family) を推奨し、家族計画や中絶に反対した。このような活動方針は、教会の普及活動に、ある程度、貢献していたものと思われる。

文鮮明は、複数の従属組織を形成し、これらを通して社会の異なったグループとの関係を維持した。国際文化財団 (International Cultural Foundation)、科学統一に関する国際会議の年次会議 (International Conference on the Unity of Science)、教授のための世界平和アカデミー (Professors' World Peace Academy)、アメリカ社会統一機構 (The Confederation for the Unification of the Societies of the Americas: CAUSA) 等の組織が、結成されている。CAUSAは、ラテンアメリカにおける共産主義に対抗するための組織である。統一教会は、アメリカ国内および諸外国で、多数の新聞を発行している。(『The Washington Times』とその週刊誌である『Insight』)。

1984年、文鮮明は所得税の脱税により、2万5千ドルの罰金と18ヶ月の懲役の判決を受けた。服役中の態度が良好であったため、13ヶ月間の留置後の1985年8月、釈放された。多数の牧師が、文鮮明を擁護

するために集合し、このような告発は連邦政府による宗教組織への干渉であり、裁判所の関与すべき事柄ではないと強く主張した。

統一教の信仰体系 (belief system) については、『The Divine Principle』に記載されているように、西洋キリスト教と東洋の伝統の混合 (blend) である。人類は、真の保護者 (true parent) である神とは別離させられている。なぜならば、イヴが、大天使のルシフェルとエデンで姦淫したために、エデンから追放されたからである。人間が神と適切な関係を修復するためには、救世主 (Messiah) の到来が必要である。最初の救世主であるイエスキリストは、責任として課せられていた贖罪をほぼ完成しかけていたが、若くして死亡したために、結婚して神を中心とした模範的家族 (the model God-centered family) を築くことができなかった。この理由により、イエスキリストは、精神的救済 (spiritual salvation) を確立することには成功したが、身体的救済 (physical salvation) の確立はできなかった。第2の救世主は、原型的家庭 (prototypical family) を築くことにより、身体的救済の確立に努めているのである。『The Divine Principle』では、この第2の救世主が、1920年頃、韓国で誕生することになっていたが、文鮮明の名前は挙げられていない。文鮮明は、この点については言明を避けているが、自身を救世主であるかのように述べている。統一教会のほとんどの信者が、文鮮明を救世主であると信じている。

文鮮明は、成功した指導者 (successful leader) の典型的な例として、十分な条件を満たしている。文鮮明の伝記については正確ではない可能性がある。しかし、これまでに伝えられている文鮮明の経歴から、文鮮明自身およびその信者が、どのような指導者を希望しているのかが推測されるのである。文鮮明は、上記のカルト指導者としての典型的な性質をすべて満たしているのである。

信者が語っている文鮮明の経歴は、Campbellの分類による「英雄」(The Hero)としての典型的な生涯に該当するのである。文鮮明の父親は人間であるが、これとは別に神聖なる父親が存在し、神によって、第2の息子すなわち第2の救世主として、選ばれたのである。子供時代には、彼の特異な性格によって友人から遠ざけられていた：子供への虐待に対抗すること、宇宙との自己同一性の感覚、宗教的感情。青年期には、文鮮明はキリストに遭遇し、新しい救世主になるように最初の啓示を受けた。英雄としての特徴的なことは、迫害、苦難、投獄等の厳しい経験を経て生き延び、富を築いたことである。

特に宗教的な感覚の強い子供であった文鮮明は、家族内においても「アウトサイダー」(The Outsider)の典型であった。日本の侵略に対しても政治的活動家としてアウトサイダーを貫き、さらに、アウトサイダーとしてカルトを形成した。カルトの創始者で

あり指導者として、文鮮明は、人生の難題を完璧に解決したのである。なぜならば、文鮮明は、一つの世界を築き、その最高のインサイダー (the supreme Insider) となったからである。

文鮮明が自身を救世主であるとみなしていないならば、第2の救世主を導くものとして、「ナルシシスト」 (the Narcissist) の誇大性の性質を表していると考えられる。文鮮明が、信者にとって「カリスマ的存在」 (Charismatic Figure) であることは明らかである。これと同様に、文鮮明は、「企業家」 (Entrepreneur) としても成功している。あらゆるカルトが直面している問題は、その信仰の継続的普及 (continuity) である。しかしながら、統一教会は、長期にわたって継続されるカルト集団であると思われる。カルトが、長期的に、1つの宗教として容認されることは、教祖とその後継者の企業家としての資質 (entrepreneurial talent) によって決定されるのである。

文献

- Bromley DG, Shupe AD: "Moonies" in America. Beverly Hills, CA, Sage Publications, 1979
Deutsch A: Observations on a Sidewalk Ashram. Archives of General Psychiatry 32:165-175, 1975
Deutsch A: Tenacity of attachment to a cult leader: a psychiatric perspective. American Journal of Psychiatry 137:1569-1573, 1980
Campbell J: The Hero With a Thousand Faces. Princeton, NJ, Princeton University Press, 1968
Satinover J: Puer Aeternus: the narcissistic relation to the self. Quadrant 13:75-108, 1980
Weber M: The Theory of Social and Economic Organization. Glencoe, NY, Free Press, 1947, p 358

第5章 カルト信者 (Cult Followers)

過去20年間にわたり、カルト集団と信者の数が増加したことは確実である。しかしながら、実際の数値については、調査によって大きな食い違いがある。カルトの定義あるいは概念によって、数値が異なる可能性がある。また、完全な信者に限定した数値であるかどうかによっても、差が生じるのは当然である。カルト側から報告された統計と外部によって実施された調査の結果には、差異がある場合が多い。

Conway & Siegelman (1978) の報告では、アメリカにおいて、現在あるいは過去にカルトと関係のあった人は、約300万人と推定されている。ギャラップ調査(1978)では、850万人のティーンエイジャーが、「新・宗教」の1つに関係していたことから、Conway & Siegelman の数字とは非常にかけ離れて

いる。1981年には、さらに増加して、1300万人に達している。この数字は、全米のティーンエイジャーの50%以上を占めている。ギャラップ調査においても、よく知られているカルトに完全に入信している者の数は、ごくわずかであることが分かっている。ISKONの完全な信者は、5000人であるが、ギャラップ調査では、37万5千人と報告されている。同様に、統一教会の完全な信者は、3万7千人であるが、ギャラップ調査では40万人である。

各階層のアメリカ人が、カルトに入信しているわけではない (Galanter 1979)。ほとんどの信者が、恵まれない人々ではなく、中産階級、若年者、白人、独身者、比較的教育程度の高い人々である。男性の信者数が、女性の信者数を上回り、約2:1の割合である。Divine Light Mission に新たに入信した119人について調査して結果、97%が白人、82%が独身者、73%が20代であった。信者およびその片親あるいは両親の76%が大学教育を受けていた。統一教会の信者の場合、89%が白人、91%が独身者、信者の平均年齢は24.7歳であった。信者らは、両親のそろった完全な家庭の出身者であり、入信時には、両親に完全あるいは部分的に依存していた。

入信者 (Who Joins)

カルトに入信する人々の特徴を解明するため、各種の条件について検討した：社会・文化的要因、家族的背景、宗教的背景、人格・性格、成長過程における問題。個人がカルトに入信するのを促進するあらゆる要因は、精神病理 (psychopathology) とも関係している可能性がある。実際、カルトに入信する多数の人々が、過去に精神病理を示す証拠が認められている。ただし、精神病理の性質および重篤度については個人差がある。カルトの活動対象が、思春期後期の若者 (late adolescent) や若年成人 (young adult) であるという事実から、我々はこれらの年齢層の青年における発達上 (developmental) の問題について注目した。

社会・文化的要因

1960年代後期および1970年代においては、ベトナム戦争、核武装競争、その結果としての核戦争に対する恐怖が原因となり、体制に対する反対運動やカウンター・カルチャーが隆盛をきわめた。さらに、テクノロジーと官僚制度の急速な発展が人間性を奪う (dehumanizing) こととなり、個人主義の喪失 (loss of individualism) に対する恐怖感を抱かせるようになった。ただし、これらの仮説に関しては、一般に認められている証拠となるものはない。

カウンター・カルチャーの振興により、政治、社会、性、宗教について新しい選択肢 (new options) が

受け入れられるようになった。このような新しい選択肢は、体制側の社会秩序に絶望していた多数の若年成人ら (young adults) に受け入れられた。これらの若者以外の者は、新しい自由 (new freedom) に対して恐怖を抱いていた。カルトは、このような自由に対する恐怖感を持っていた人々の関心を集めた。カウンター・カルチャーの象徴とされる麻薬、性の解放等を経験し、その実状に幻滅あるいは恐怖を感じた人々がカルトに参加したのである。カルト信者は、伝統的な社会体制への反抗は容認されるのみではなく、求められてもいた。これと同時に、カルトは社会構造や生きる目的の原点となるものを提供し、信者らを支援していたのである。

宗教的要因

カルト信者の宗教経歴に関する詳細なデータを入手することはできない。しかしながら、1つだけは確実なことがある：強力な宗教的背景 (strong religious background) を持つ者は、このような背景を持たないものよりもカルトに入信する確率が低いことである。家族が厳格な (observant) カトリックあるいは正統派 (Orthodox) ユダヤ教である場合、カルトに入信する者は比較的少ない。一方、リベラル派のユダヤ教あるいは厳格な宗派に属さない家庭の出身者が、カルト信者の多数を占めている。若年者の宗教観 (religious attitudes) は、その両親との関係によって決定されることを十分理解しなければならない。厳格な宗教的環境 (structured religious atmosphere) に反発を感じていても、このような環境に育った者は、カルトの教条的で管理された生活様式には関心を持たない場合が多い。他方、家庭に宗教的厳格さが乏しく (less observant)、信仰に不誠実であると感じている人々には、カルトが非常に魅力的に思われるのである。

家庭的背景

我々の臨床経験から、家庭からの成人としての分離 (separation) の困難が、カルトに入信する主要な動機 (motivation) となっている。カルト信者は、両親のそろった、団結力の強く、中産階級で、優秀な成績を上げることが高く評価するような家庭 (intact, close-knit, middle-class, achievement-oriented family) の出身者が多い。このような人々にとって、カルトは家庭に匹敵する重要な性質をもつ集団となり、敵であるカルトに依存して家庭に対する反抗が実現する。一部の家庭については、「カルト原性」 ("cultgenic") を思わせる要因が潜んでいる可能性がある。

カルトを選択して入信する人々に特異的な人格のパターン (personality pattern)、あるいは重大な精

神的葛藤は認められない。しかしながら、社会学者と心理学者らは、子供たちをカルト信者に駆り立てる (predispose) 家庭の特性 (family characteristics) を指摘している：1) 両親が独断的で過干渉であるため、子供たちに意志決定 (decision making) という大人の役割を与えることができない場合。このような背景で育った子供は、全ての決定を他人がしてくれるような集団を探し求める可能性がある。2) 過度に子供たちの自由を認め、一貫した価値観や判断力 (a consistent system of values and expectations) の重要性を子供たちに提示することができない場合。このような家庭で育った子供たちは、成人としてのアイデンティティの基盤となる根本的観念を内面化することができない可能性がある。このような青年たちにとって、カルト指導者のカリスマ性は非常に魅力に感じられる。3) 子供たちに能力以上の期待をかける家庭。このような家庭で育った子供たちは、カルトが信者に何も期待しないこと、あるいはカルトが上昇志向に反対することに安堵感を抱くようになる。4) 一見すると普通な家庭であり、目立った対立はないが、温かみの欠ける家庭。このような家庭の子供たちは、カルトが最初に行なう「愛情爆撃」 ("love bombing") にとくに魅力を感じるものである。5) 親が、子供たちに対して、一人前に扱われているという実感 (a sense of being valued as adult) を与えられない場合。このような家庭で育った子供たちは、成長して心理学的な意味での大人になろうとは思わない可能性がある。カルトの信者になれば、これらの子供たちは永遠に子供のままであることが許され、「自立できない」寄生者 (dependent) として家庭内に留まるという屈辱からも解放されるのである。

精神科医のHardat Sukhdeo (1981) は、多数のカルト信者を研究の対象とし、信者の家庭に典型的な特質を記述した：信者らの家庭は、少人数の核家族が中心であり、内省的である。受動的な父親と主導権を握る母親の組み合わせが多い。これらの親たちは、第1世代あるいは第2世代の移民の子供たちである。自分たちの親の世代とは価値観やアメリカの理想主義に対する同化について意見が食い違っている。自分たちが所有することができなかった財産、教育、経済的安定性を、子供たちが獲得することを期待している。一般に、このような親は、自己の感情に対して不信感を抱き、他人との会話で自己を表すことができない。これらは、価値観の相違に由来する自己犠牲なのである。

カルト信者：複合像

中産階級に所属する理想的な若い白人 (white, middle-class, idealistic young people) が、現代のカルト信者の多数を占めている。これらの若者たちは、

孤独 (lonely) で抑うつ的 (depressed) であり、不確実な将来に対して恐怖感 (fearful of an uncertain future) をもっている。依存 (dependent) 傾向がある。強い愛情希求がある。自分の力で自己を精神的に支えることができないため、外部の力が必要なのである。外部の力の助けにより、自尊心、所属感、生き甲斐を獲得しようとするのである。一般に、これらの若者は、社会全般に対して、憤慨し、あからさまな敵対心 (hostile) を示す場合が多い；社会がこれらの若者を絶望感に陥れ、若者たちを正当に評価していないと考えている。多くの青年は、若年成人としての自由で多くの期待を抱くものであるが、このような期待感が、かえって青年を圧倒する可能性がある。

信者および元信者に対して、カルトに入信した理由を尋ねてみた。多数の回答が寄せられたのは、孤独感、家族との別離に伴う喪失感；情緒的な生活における挫折感（友情に対する絶望や失恋経験）；環境からの疎外感（環境による規則や方向性の提供の失敗）；不安定感と生きる意味の喪失感；理想主義と精神性に対するニーズ；カルト信者である友人あるいは恋人からの勧誘。

カルトに入信する動機は、思春期後期 (late adolescence) の発達上の問題に起因する可能性がある。最も基本的な動機は、成人としてのアイデンティティを確立することに対するニーズである。我々は、カルトに入信することは、若年者の成長プロセスにおける不適応であると考え。ただし、この時期の青年にとって、アイデンティティの確立は特に困難な問題である。カルト信者に認められる多くの行動や人間関係は、成人としての自立に伴って発生する問題の解決の試みであると考えられる。

これらの行動の中で特に共通性の高いものとしては、強い依存へのニーズ (dependency need) が挙げられる。このニーズは、人から愛されたいという熱望 (a wish to be cared for) として表されるが、また自己防衛的な敵対心 (rebelliousness) として認められる場合もある。自分の人生についての決定の保留や、自分の人生についての責任の回避が、1つの集団の限られた限定空間内部での存在願望を助長するのである。カルトという限定空間では、信者に代わって、すべての決定がなされており、日々のルーチンがその予期性と安心感提供している。

カルト信者に対して心理テストを行なった結果、信者における依存特性 (dependent trait) が確認され、このような依存性には嗜癖 (addictive) との関連性が認められる。つまり、欲求充足を外部の源泉に求めるのである (Spero 1982)。このような欲求を持っていることから、カルト信者に顕著な性的および社会的関係における問題が多発するのである。カルト信者の場合、入信する前に、麻薬乱用 (drug abuse) を経験していたものが非常に多いが、信者らの依存

的性格によって、このような傾向も説明づけられる。カルトに入信することは、嗜癖の対象が麻薬からカルトに移ったにすぎないのである。

どのカルトを選択するかということは重要な問題である。というのは、カルトにより、信者に課せられる行動の規制、指導者によって行なわれる思考コントロールの程度、性行為、信者全員が経験する捕囚としての体験等が異なるからである。攻撃衝動や性的衝動に対する強力な外的なコントロールを必要としている者は、節制を要求する禁欲的なカルトに魅力を感じる。開放的な環境のカルトには、柔軟な人間関係を許容できる者が入信する傾向にある。性行動に寛容なカルトの場合、成人の性行為に対する罪悪感との葛藤を克服するのに役立つかもしれない。

成人として生産的な生活を営むためには、独立心 (independence) に加えて、ある程度の楽天主義 (optimism) と自尊心 (self-confidence) が要求される。カルト信者には欠けているのは、これらの性質である。信者らは自尊心の欠乏に悩み、自信喪失的傾向が強いのである。これらの性質は子供時代に素因がある者であり、学校や課外活動での失敗経験によって一層強化されるのである。自尊心が低下している場合、不明確なもの (ambiguity) に対して許容性がなくなりやすい。確実性 (certainty) を追求することにより、極端な態度 (polarization)、性癖、忠誠心を示すようになる。さらに、自尊心の欠乏と偽りの楽天主義により、伝統的な社会を拒絶する結果となる；このような若者には理想とする社会概念がないため、指導や規制のない状態に取り残され、たやすく混乱状態に陥って圧倒されるのである。それに対して、カルトやカルト指導者は容易な解決法を提示してくれる。1人のカルト信者の言葉によれば、「言われたとおりに受け入れて信じさえすればよい。そうすれば、絶え間ない葛藤から逃れることができるのである。」

多数のカルト信者が言っていることだが、入信する前には、ほとんど友人がなく、自分自身を同一化できる場所、体制、職業などもなかった。カルトが、人生の意味、所属感、人生のシナリオを提供してくれたのである。カルトが、これらを提供してくれなかったならば、非常な孤独感にさいなまれていたであろう。カルト集団内では、各自が善行を行っていると感じている；世界を救済できると感じている者さえいる。特別な存在になることができるのである。自己のイメージが変化することにより、過去の孤独感や空虚感から解放されるのである。過去には阻害されていた者が、新しいより良い社会においては重要な役割を果たしているのである。

自尊心の欠乏に伴う疎外感が原因となり、強い敵対心を抱き、理解できないものに対して憤りを感じるようになる。カルト信者は、いろいろな方法でこのような感情を正当化するのである。ある信者は、

墮落した悪徳のはびこる社会に対して反抗しているという。他の信者は、両親のことを偽善者とよび、行動における一貫性の欠如を指摘して、両親に責任を転嫁するのである。カルトは、その重要な目標を擁護しつつ、このような敵対心を認めて支援するのである。このようなカルトの対応は、博愛主義の形を取る場合もある。攻撃的衝動に対して恐怖を抱く者にとって、カルト生活における儀式は重要である。というのは、欠乏している内部の抑制力が、外部の力でカバーされるからである。

多数のカルト信者が経験しているエピソードとしては、方向性の喪失 (disorientation) あるいは崩壊 (fragmentation) が挙げられる。これらのエピソードと同時に人生が破滅するという感覚を経験している (Appel 1978)。Erikson (1963)は、このような状態を「同一性拡散」 ("identity diffusion") と呼び、「身体的親密さ、職業選択、激しい競争、心理-社会的自己定義等を必要とする経験が重なり合って」、同一性拡散が発生すると述べた。

重要なことは、このような崩壊現象が、大人となる過程に対する極端な反応であるということである。極端な反応を示す以外にはどうにもならないのである。同一性拡散の状態に陥っている若者は、終末論的なカルト (apocalyptic cult) に入信する傾向がある。世界崩壊 (world destruction) の概念は、このような若者の恐怖感 (fear) と共鳴し、カルトに入信することは生き残り (survival) を約束するのである。

精神病理 (Psychopathology) の発生

これまでの章で述べた特徴は、成長過程における問題 (developmental problem) であったが、さらに重大な精神病理に由来するものである可能性も否定できない。信頼性の高いデータを入手することはできない。というのは、対象とされたカルト集団間に著しい格差が存在し、調査担当者が用いた診断基準にも差異が存在するからである。したがって、各種の研究を相互に比較することはできない。大多数のカルト信者は、カルトに入信する以前になんらかの障害を経験していることが共通の見解として報告されている。しかしながら、障害の性質については著しい隔たりが存在する。

Willa Appel (1978) は、大多数のカルト信者が健康な人間であると主張している。ただし、人生における特別な困難に遭遇した時点でカルトに入信したのである。心理学者の Margaret Singer (1979) は、カルト信者の75%は、「基本的に正常」 ("basically normal") であると述べている。G. Kelly Associatesの脱会支援グループ (deprogramming group) は、100人の「リハビリテーション」症例を対象として調査を行なったが、68% (ほとんどが統一教会の元信者) が「安定状態」 ("stable") であり、入信時に「軽度

の青年期の問題」 ("mild adolescent difficulties") を経験していた。

これとは対称的に、精神科医の John Clark (1978) は、実際に調査を行ない、カルトへの関与のあらゆる段階にある人々の約60%が「慢性障害」 ("chronically disturbed") に罹っていると主張した。残りの40%は基本的には正常であるが、改宗する可能性が高い人々であった。というのは、「成熟の危機」 ("crises of maturation") と熱心な勧誘者からの圧力を受けた場合には、入信する危険性が特に高くなるからである。

重度の障害を呈する人 (seriously disturbed people) が、カルトに入信することは非常に稀である。この事実は一般に認められている。実際には、精神病的 (psychotic) な人が改宗したり、集団のメンバーとなることは困難である。最初は熱心であっても、まもなく危機状態に陥り、現実に対して一層自閉的な傾向を強めることになるのである。

Spero (1982)は、65人の信者について検査と治療を行なった。このうち35人は「軽度から重篤な障害」 (mildly to seriously disturbed) を有する家庭の出身者であり、20人は過去に精神科医または学校の心理カウンセラーのコンサルテーションを受けた経験をもっていた。治療前、治療中、治療後において、被験者65人全員を対象として心理テストを行なった。その結果、2つの基本的な類型が明らかとなった；1) 認知プロセスが極度に限定され、常同症的傾向があること、あるいは2) 抑うつ傾向の躁的な否認。最も重要な所見は、自己と非自己および内的現実と外的現実の区別の困難性であった。65人中24人において「ボーダーライン」現象が認められた。このうち3人については、治療開始直後の数ヶ月間において、「ずれ」 ("slippage") あるいは「漂う」 [現実感が持てない] ("floating") ようなエピソード (注意障害) を何度も体験していた。Spero は、衝動コントロールの低下、自己愛的傾向、批判に対する脆弱さ、防衛的に良い自己と悪い自己へ分裂 ("splitting") すること、現実認識および他者との関係における幼児性についても指摘した。これらの所見は精神病またはボーダーライン状態を示唆するものであるが、Spero は確定診断を下していない。また、このような病態の程度や発生率についても言及していない。

さらに明確な結論を導くためには、年齢と社会的状態が一致する対照群との比較を行なうことが必要であるが、文献から入手した全般的な印象では、ほとんどのカルト信者が人格障害 (personality disorder) あるいは発達障害 (developmental disorder) の徴候を示している。まちがいがなくカルト信者の精神病理は、他の診断カテゴリーにも広く分布しているのである。したがって、これらの信者は単に一般の人々と異なっているだけではないのである。精神病理の発生率はカルト信者に高いが、一般における発

生率との比較研究は行われていない。

カルト集団から脱会する者と集団に残留する者 (Who Leaves and Who Stays)

カルト集団は、信者の入信期間あるいは信者の自然減少についての情報を公開することには消極的である。35歳以上のカルト信者が少ない、という事実(大多数の調査では10%以下)から、多くの信者がドロップアウトしていることが示唆される。信者が脱会する理由は様々である。通常、入信した動機と関連した理由による場合が多い。自分の意志で脱会した者と強制的に脱会させられたり脱洗脳をうけた者の間に相違が予想される。

これまで見てきたように、多数のカルト信者は、特定の発達段階 (a particular developmental stage) において入信していた。とくに、思春期後期 (late adolescence) が多く、入信すること以外の方法では解決困難な問題に直面する時期である。両親から独立すること、集団の一部としてのアイデンティティの確保、特別な存在であるという感覚等の問題の解決が迫られている。発達過程 (development) が進行するにつれて、結婚に対する欲求や親子関係等が重要性を増してくる。カルトに入信することは、もはや必要ではなくなり、実際、このような信仰は人生における成功に対する障害となるのである。

カルト外部の家族や友人との接触 (attachment) の継続性が、脱会へのモチベーションを構成する。家族や友人との絆を保つことは、抑うつ感と罪悪感を引き起こすが、結果としてカルトへの幻滅 (disillusionment) が生じ、入会当初の誘惑の期間が終了したことになるのである。厳格かつ組織的な生活の単調さには馴染めない信者もいる。また、18時間の綿密に決まっている予定のためによる睡眠剥奪に耐えられない者もいる。

Conway and Siegelman (1982) は、400人のカルト信者を対象として調査を行なった。これら信者の大多数が、入信中に、身体症状、精神障害、情動障害を経験していた。身体症状としては、極端な体重の増減、皮膚疾患、月経不順、男性信者の場合には顔面の髭の減少が認められた。情動障害としては、罪悪感、恐怖感、抑うつ、自殺衝動、敵対心が挙げられ、結果的に暴力に訴えるケースがあった。知覚障害、記憶障害、認知障害を経験した者が半数以上を占めていた。潜在していた病理が入信によって顕現したがどうかには関係なく、「カルト選択」 ("cult option") が失敗であり、これが動機となって脱会に至るのである。

Ungerleider and Wellisch (1979) は、宗教的カルト集団の信者と元信者の合計50人を対象として調査を行なった。これらの人々は、Ungerleider and Wellischのもとを訪れて、脱会の問題 (deprogramming) に

ついて話し合いを行なった。その結果、これらの人々を4つのグループに分類することが可能であった：第1のグループは、脱会に対して恐怖感を抱いていた22人の「信者」。第2のグループは、過去に脱会を試みたが成功しなかった11人の「復帰信者」。第3のグループは、脱会に成功した9人の「非復帰信者」。第4のグループは、自分の意志でカルト集団を脱会した8人の「任意の元信者」。

各被験者に対して、精神医学的検査と一連の心理テストを実施した。カルト信者の2つのグループ(「信者」と「復帰者」)には、極度の社会的および情緒的疎外感が認められた。衝動のコントロールが困難であり、超自我が欠如していた。これらの信者にとって、カルトは外的良心 (external conscience) としての役割を果たしている。信者らにおいては、抑圧と否認を強化することにより、敵対心と薬物摂取が制御されているのである。

自分の意志でカルト集団を脱会した者は、組織的かつ計画された環境をあまり必要としていない。このグループ以外の3つのグループについては、いずれもカルトにおける組織的な社会機構が信者の支えとなっていたが、脱会に成功した者は、このカルトの組織性と引き替えに従属的な役割が強制されていることに気付いているのである。カルトに残留している者は、カルト内部で地位が向上していると思っている。一部の信者は昇進するが、現実吟味が正しく行なわれていない場合が多い。

脱会者と比較すると、カルト集団に残留した者の方が、家族に対する敵対心 (hostility) が非常に強い。一部の信者では、一時的にカルト指導者に敵対心が向けられるが、これは急速に抑制されて、かわりにカルト外部の人々へ投射されていくのである。

カルトに残留するかカルトから脱会するかについては、2つの重要な要因によって決定される。第1の要因としては、カルトの有効性である。すなわち、身近な問題を解決しようとする場合に、カルトが有効な解決策を提示してくれるならば、信者はカルトに残留するであろう。信者であることにより、苦痛や欲求不満が解消され親密な人間関係が築かれるならば、信者は残留するはずであろう。反対に、信者であることが非常に苦痛である場合、信者は脱会するであろう。第2の要因は、入信の動機の強さである。成長に関する問題や一部の人格障害は一過性であり、時間の経過によって、カルトの必要性が減少あるいは消失する。ボーダーライン状態のように、入信の動機となった問題が深刻で解決が困難な場合、カルトに残留しようとする傾向が強くなる。相対的に健康で有能な信者は、権力と影響力が保証された地位まで昇進した場合、カルトに残留する者もいる。

文献

Appel W: Cults in America. New York: Holt, Rinehart,

- and Winston, 1983
- Clark JG Jr: The Manipulation of Madness. Unpublished paper presented in Hanover, Germany, 1978, p12
- Conway F, Siegelman J: Snapping. Philadelphia, PA, JB Lippincott, 1978
- Information Disease: Have Cults Created a New Illness? Science Digest, January 1982, p92
- Erikson EH: Childhood and Society. New York, WW Norton, 1963
- Galanter M, Rabkin R, Deutsch A: "The Moonies": A Psychological Study of Conversion and Membership in a Contemporary Religious Sect. American Journal of Psychiatry 136:165-169, 1979
- Gallup G: Gallup Youth Survey. New York, NY, Associated Press, 1978, 1981
- Singer M: Coming Out of the Cults. Psychology Today, January 1979, pp72-82
- Spero MH: Psychotherapeutic Procedure With Religious Cult Devotees. The Journal of Nervous and Mental Disease 170:332-344, 1982
- Sukhdeo HAS: A Clinician's Reflections on some of the Problems of the Jewish Family in Contemporary America. Unpublished pamphlet (see Appel 1983), 1983
- Ungerleider JT, Wellisch DK: Coercive Persuasion (Brainwashing), Religious Cults and Deprogramming. American Journal of Psychiatry 136:279-282, 1979

第6章 死海セクト：現代カルトのモデル

精神科医が、今日の西洋社会におけるカルトの普及状況を理解しようとする場合に、様々な問題と遭遇する。これらの中で2つの問題については、古代世界から続いている類似した宗教組織をモデルとすることにより、部分的な解決が可能である。第1に、現代カルトが精神科医に対して抱く共感から敵意にわたる個人的な感情が喚起されにくい。第2に、集団の存在理由を解明するという問題については、この場合、実際の経典を利用することによって解決される。

エリコ〔訳注：パレスチナの古都。モーゼの後継者でイスラエルの民の指導者であるヨシュアに率いられたイスラエル人が、攻略に成功し神の恵みを経験した地。〕の南、クムラン付近の洞窟と周辺の大きな建物の廃虚内で発見された古代の巻物から、ユダヤ砂漠で作られた集団的コミュニティーの生活を再現することが可能である。古文書学的証拠、放射性炭素法、コインの同定により、B.C.2世紀からユダヤ人のローマに対する反乱までの期間のある時期以降、コミュニティーが存在していたことが解明された。ユダヤ人のローマに対する反乱は、西暦140

年に、終了した。我々が人工的に再現した画像は、当時の古代歴史家ら（Josephus, Philo, Pliny）の記述と一致している。これらの歴史家は、エッセネ派とよばれる分離派セクトであった。確認作業は正確性が乏しく、今回検討した経典は別の類似した集団に由来する可能性があるが、このような事柄は我々の目的に関しては重要ではない。

多数の集団が砂漠地域で形成され、経典は各集団で異なっていた。現存する記述文書の本体に関しては、ある程度の一貫性が保たれていた。一般に死海グループはセクトと呼ばれ、我々が本書で扱っているのはカルトと呼ばれている。最初に示した定義の項目の内容に基づいて検討した場合、死海グループは既存の宗教を純粋化し、これによって宗教活動を展開したのであり、新しい宗教を創始したわけではない。後述するように、これらのグループの組織は、我々が研究しているカルトの組織と多くの点で共通しているのである。

死海グループに関する保存文書により、これらのグループの参加者が、セクトに対してどのような精神力動的な期待 (psychodynamic expectation) を求めているかを知ることができる。また、周辺地域社会とこれらのグループの関係についても理解することが可能である。このような古文書の研究から推測した事柄を現代のカルト現象に当てはめることもできるであろう。

セクトの構造と行動の規則

我々が利用することができた当時の記録によれば、グループのメンバーには厳格な規則 (strict discipline) の遵守が義務づけられていた。個人はグループのあらゆる決定に従わなければならなかった (group decision)。個人には発言権がなく、個人的な行動をとることも許されなかった。役員や指導者の任命もグループが決定していた。各メンバーの行動を評価検討し、その結果に基づいて各自に地位が与えられる。地位ごとに正しい行動を規定し、これらの行動に対する規則を定めた。メンバー間のエチケットやメンバーとコミュニティーの間における規則も設けられた。コミュニティーからの追放を含む刑罰や罰則については、詳細な説明が加えられている。

メンバーとなる時 (admission) には、すべての個人財産をコミュニティーに供出した。これと引き換えに、コミュニティーが責任をもってメンバーが必要とする全ての物を提供した。

セクトのメンバーとなる場合、規律正しい行動をとり、グループの規則に従うことを証明しなければならなかった。メンバーとなる候補者は、グループの規則を受け入れ、規則に従い、その秘密事項を守ることを宣誓することが義務づけられていた。候補

者がメンバーとなるためには、段階的プロセスが定められていた。

グループの生活様式 (*modus vivendi*) は、儀式によって厳格に規定されていた。入浴、食事、信仰が儀式として定められていた。グループの経典研究が毎日行われたが、とくに安息日 (*Sabbath*) にも実施された。経典の内容の多くは、グループ独自の利益に役立つように独特の方法で解釈されていた。

グループの歴史によれば、同セクトは男性信者のみで構成され、結婚が禁止されており、独身主義が要求された。他者の子供たちをメンバーの候補とすることを認め、これに伴って教義が修正された。後になって、結婚が許可されたことを示す記録が残っている。クムランの古文書には、高德の男性を誘惑した女性について記載されている (Broshi 1983)。

理想的なメンバーの行動と態度のプロフィールを経典から再現することが可能である。すなわち、家族との絆を断ち、その代わりに同胞との絆を結んだ人間である。この男は自分の所属する社会の外側にいる人々を憎み、暴力によって破壊したいという願望を抱いている。つまり、この男は、他者を批判して拒絶することにより、新しい同胞に対する絶対的な愛情を獲得したのである。

このような人間は、あらゆる事柄において純粋性 [浄: *purity*] を追求していた。経典の規則に関連した純粋性もあるが、作り上げられた場合が多かった。身体と精神の純粋性が要求され、女性と別れて色欲を断ち、儀式によって排泄物から浄化され、入浴の儀式も規定されていた。他者の穢れ [不浄: *impurity*] を軽蔑することにより、自己の純粋性に対する欲求が一層高められた。禁欲的かつ自己否認的な行動をとっていた。グループの規則に従い、個人的な行為によって満足を得ることは禁止されていた精神異常者、愚者、精神障害者の取り扱いについての問題が記録されていたことから、同セクトは、外部社会に適応できない者を吸引していたのではなかろうかと思われる。

セクトの信仰

特定の信仰を浸透させることにより、神秘性や黙示性が一層強化される: 神との神秘的な交わり、純粋性を求める生活、同胞愛、グループが要求する禁欲を追求することにより、特別な覚醒 (*enlightenment*) に至ることができた。神との交わりは、神による特別な保護と同時にグループの信仰の証であった。同グループは、砂漠に入ること (*going into the desert*) により、自らが出エジプトを経験したユダヤ人の砂漠の子孫と同一化していた。その結果、神との契約によって新しいイスラエルになるように運命づけられていたのである。(砂漠に入ることは、政治的対立者からの迫害を逃れるための効果的な方法

であることも理解しておく必要がある。) グループの新しい思想に基づいて、古典的な経典を解釈し直すことによってのみ、真実を確認することができるのである。早晩、善と悪 - 明と暗 - の闘争は終了し、善が悪に勝利するのである。同胞だけが生き残ることができるのである。このような二元論は、ギリシャやペルシャの前例には適合するが、ユダヤの伝統と信仰には異質なものであった。

精神力動 (Psychodynamics)

1つの症候群が、次の段階にしたがって、形成されるのである: 1) 広い世界における成功への努力の放棄、つまり同胞よりも出世し、妻を持ち、子供をもうけて財産を獲得することの放棄。2) 外の世界 (*outside world*) に対する敵対的拒絶 (*hostile rejection*)、セクト内のメンバーに対する同胞愛への方向転換。3) 神の意志、セクトの規則、長老とコミュニティーの支配への従属。4) 自己犠牲と厳格なセルフ・コントロール: 性的欲求の抑制; 身体と精神の純粋性の維持; 勤勉さと儀式に基づく各種の義務の成就への要求。

報酬として、愛されているという感覚、グループおよびその指導者から保護されているという感覚 (*the feeling of being loved and protected by the group and the leader*) を獲得した。他のメンバーと自分を同一化 (*identify*) することができ、メンバーとの一体感を得ることができた。神によって愛され、保護されているという感覚、神と特別に交わることができたという感覚を得た。自分自身を、家族、性欲、野望、個人的願望から分離する (*cut off*) ことができたという幻想を手に入れた。実際には、自分の現実の世界 (*real world*) を破壊する (*destroy*) ことにより、ある種の身体的あるいは精神的感覚において、生まれ変わること (*reborn*) ができたように見えるだけなのである。自己の超自我の要求に従うために、自分の本能的欲求を抑制したのである。

多くの場合において、儀式を行なうことが従属 (*submission*) を表し、儀式によってある種の満足が得られるのである。禁欲と純粋性は、神との神秘的交わりの感覚と、神との親密性を支えるものである。思考と行動は良心に反映され、信者は、両親あるいは最終的には超越的な両親との和解に至り、グループが既存の体制社会に打ち勝つことを期待するのである。勝利は、グループを通して、代理的に、達成されるのである。

これらのセクトでは、ほぼ同時に最初の古典的な黙示 (*apocalypse*) が出現する。黙示によって、世界の歴史が示される。すなわち、善と悪の闘いが終わって、世界が崩壊 (*destroy*) し、その後、再生 (*rebirth*) するのである。世界の再生は、救世主の指導による場合が多い。世界の崩壊から世界の再生に

至る経過は、分裂病発作の初期にもしばしば認められる。また、境界型人格障害の精神病的な反復性のエピソードにも確認される。これらの症例では、患者を圧倒しているどうにもならない怒りを払いのけようとする努力によって、黙示的な力動が働くのである。おそらく、一般的な意味における黙示についても、苦悩の源泉を解消できないために、混乱状態となった社会のための情動発散チャネルとしての役割があるのではないかとと思われる。

経典が黙示としての性質を有することから、メンバーに共通する初期のどうしようもない怒りの感情によって結束されていることが証明される。グループはこのような怒りの感情をコントロールするのを手助けするのである。外部世界 (outside world) に対する憎悪、グループ内部に対する愛情の反動的な要求、厳格な自己規制、極端な処罰等が、攻撃的衝動を裏付ける証拠となる。怒りは、個人の精神病理によって発生する可能性もある、あるいは、コミュニティにおける実際的な苦痛に対する反応として現れている場合もある。怒りの原因は何であろうとも、人々はグループに魅せられているのである。というのは、グループも怒りの感情にとりつかれている (obsessed) のであり、同時に怒りを管理する方法も併せもっているからである。

セクトとカルト

現代のカルト現象を理解するために、例を挙げて説明したが、このような宗教的集団から、何かを理解することができたであろうか？ 現在の西欧地域において活動している集団と上記のグループは、2つの重要な違いがある。上記のグループは、350年ほど続いている。我々が論じているカルトの多くは、数10年程度の短期間活動しているにすぎない。さらに、これらの古代グループは、信仰と信仰に基づく行動を目指し、これによって拡大していったのである。周囲の人々の宗教的性質を吸収していったはずである。しかしながら、これらのグループは、保守派と自称し、信条、儀式、行動において、ユダヤ教の神髄に到達することを目標としていた。これとは対称的に、全てのカルトには該当しないが、現代カルトの多くは、外向的であり、地域や人々の育った環境にとって異質な宗教的性質を帯びているのである。

しかしながら、詳しく観察してみると、上記のセクトと現代のカルトには多くの共通点が存在する。ほとんどの現代宗教活動は、確固たる地位を築いた宗教集団が、宗教活動を改めることによって、展開してきた。このような宗教集団は、長い期間にわたって、苦境に耐え、その間に指導者が整然と後退していった。宗教活動は、感情的関与が強調され、哲学的課題は軽視される方向で変化していった。宗教

活動において強調される点は変化し、急激な変革よりも旧来の信仰形態が更新される場合が多い。

このような方法で普及していったいくつかのグループは、宗教組織によって保護 (protection) されることを希望する若者の信者獲得において、競合している。前述のハシデイズムのルバヴィチ派は、まさにこの方法で普及していった。同派は、構造組織を提供し、伝統的儀式と規則に従うことを条件に入信を認めている。野望、勇気、上昇志向といったものは不適切なものともみなされている。

これらのセクトは、新しいカルトと区別される。新しいカルトの場合、確立された組織を持たず、継続的な指導者の交代も重要視されない。これらのグループは、異質の信仰や個人的行動規範も取り入れて外向的である。しかしながら、現在では、両方の種類のカルトが活動しているのである。前述の古代ユダヤ教のセクトは、1つのスペクトルの末端に存在していたのではないかとと思われる。この場合、反対極には、遠心性 (centrifugal) のグループが位置していたのである。対立するセクトについての資料はほとんど存在していなかった事実から、上記のユダヤ教のセクトが成功を収めて普及したことが証明される。反正統派の宗教活動について全体的に考えると、求心的 (centripetal) 成分と遠心的 (centrifugal) 成分の両方が存在すると思われる。

解決手段としての宗教

以上の結論が正しいとするならば、大衆が宗教的解決を求めるのはなぜであろうか？ キリスト誕生前後の150年間にわたる古代世界を苦しめていた問題を探してみるならば、多数の問題が発見される。例えば、抑圧的な課税政策による経済的困窮、軍事的脅威あるいは敗北による不満、政治的陰謀による不正と不安が挙げられる。これらの問題はいつでもどこにでも存在する。宗教的解決を期待させるものは、これらとはどこかが違うはずである。

その確実な要因については、求心性と遠心性という二分法に基づく解決法によって示唆される。アレクサンダー大王による征服後のヘレニズム文化の浸透とその後3世紀にわたるローマ文化の普及によって、人々の交流が進み、文化的葛藤が発生した。Baron (1952) から引用する：

記録が残されている歴史の中で最も融合が進んだ時代において、数100万人のユダヤ人が、異質の宗教教義や儀式と融合の渦に巻き込まれたのである。ヘレニズムの浸食作用によって、東洋の確立された信仰と文化は衰退し、政治経済的統合が進んで、新しい統一組織が形成された。

新しい解決手段としての宗教が求められるように

なった。というのは、過去の宗教は、対立する文化との激しい競争によって、解決手段としての役割が衰えたからである。

マカベア家の戦争は、表面上はシリアの侵入に対抗する戦いであったが、ユダヤのヘレニズム化とユダヤ教保守派間の市民戦争、とみなすのが適切であると思われる (Bickerman 1947)。当時、エッセネ派とその類似したセクトは、地方や砂漠のコミュニティに退却していた。サドカイ派やパリサイ人と対立関係にあったため、マカベア家とシリアの対立は激しい戦いとはみなされていなかった。この戦いの1つの中心として、エッセネ派を核とするセクトのグループがあった。他の中心は、さらに大規模な宗教的グループであり、融合的で異端派であった。他国のの人々と文化の侵入に直面し、前者のグループは、宗教心に基づく外国人排斥 (xenophobia) の態度をとり、これとは反対に、後者のグループは、宗教心に基づく外国人との友好的態度 (xenophilia) をとった。

これらのグループは、その追従者に対して、希望するものを提供した。すなわち、信頼性が高く、保護を約束してくれる親密な宇宙観を提供したのである。他国の文化と共に新しい神や予言も人々の中に入り込み、社会は混乱状態にあった。混乱した社会の中であって、大人になるための成長過程にある青年にとって、祖先が信奉してきた伝統的なモデルを受け入れることはできなかった。混沌とした社会で生きることが可能であるものもいた。これらの人々は、従来の伝統的な形態に安らぎを見出すことができているのである。しかしながら、厳格、明確、確実な様式 (mode) を必要とするものも存在した。従来の正統派としてのモデルを選択するか、あるいは新しい希望を約束するモデルを選択するかは、若者が築いてきた両親およびコミュニティとの力動関係によって決まるのである。

現代社会のジレンマに直面し、多数の若者は、独自の宇宙観に基づく確実性 (certainty) を要求するのである。これらの若者は、多元的コミュニティの不確実性 (ambiguity of a pluralistic community) を許容することができないのであり、自分たちのニーズを満たす宗教グループに入信するようになるのである。若者が選択する宗教が、求心的 (centripetally) であるか、遠心的 (centrifugally) であるかについては、子供時代の両親との葛藤や自尊心の問題の解決方法等によって決定される。

不確実なものが許容できなくて (intolerance of ambiguity)、確実なものを追求 (quest for certainty) しようとする傾向は、自信喪失、臆病、自尊心の低下、極端な態度、各種の人格障害に伴うある種の忠誠心等に反映されている。人格が、厳格な外的組織を必要とするレベルにまで障害が進行しているかどうかについては、伝統的な宇宙観の崩壊の進行度、

伝統的な宇宙観が提供していた支援や保護がどの程度揺らいでいるか、異質の宇宙観がどの程度浸透しているかによって決定されるのである。人格障害の発生率が、経時的に変動するかどうかについては不明である。人格障害の発生率の変動を否定する根拠はまったくない。ただし、幼児期の栄養状態や育児法等が、人格障害の発生に関与していることは当然予想される。

確実性 (Certainty) に対するニーズ

2000年前のユダヤ人の若者と同様に、今日の青年も人生の難題に直面しているのである。多数の大規模な西欧コミュニティには、軍隊の侵入ではなく、表面的なコミュニケーション、急速な輸送・通信、テレビと映画、簡単な旅行等によって、異質文化 (Alien) が導入されているのである。伝統的なローカルな形態は、種々の挑戦を受けることになる。世界主義 (cosmopolitanism) は、異質文化に寛大であり、伝統的なヒエラルキーとヒエラルキー的価値観の崩壊をまねいた。これらが崩壊したことにより、垂直方向にも水平方向にも移動が可能となったのである。すなわち、若者たちは、親の置かれた状況を越えることを迫られるようになったのである。この考え方は、上述した現代の弱者としての若者についての我々の見解と、一致するのである。つまり、競争すること、決断すること、責任を果たすことに対して最も激しい恐怖感を抱く若者たちは、まったく競争のない同胞愛の集団による安全保障 (security) を追求するのである。このような集団では、我々が暮らしている厳しく冷酷な現実の世界から、若者たちを保護してくれるのである。

現代のカルトには、黙示的な要素が認められる。黙示的な要素は死海のセクトにも存在していた。ジョーンズタウンの例では、黙示的な自殺 (apocalyptic suicide) によって、カルトが自壊したのである。このような黙示的要素がない場合においても、抑制されない怒りは、確実に存在するのである。怒りの感情は、集団内の愛情攻勢によっても抑制することは不可能である。組織化されていない社会で自立することに対して恐怖感を抱いているために激怒しているのであるが、このような若者がカルトの魅力にとりつかれるのである。カルトは、若者たちに、優しい同胞の中で生まれ変わるすなわちある種の永遠の愛、理解、優しい母親という幻想を、与えているのである。Chasseguet-Smirgel (1985) は、このような集団の母親的な性質について指摘し、救世主的な集団の指導者に関しては、父親的存在というよりもむしろ誘導者としてのガイドの役割を見出している。

我々は皆、ある種の予測性 (predictability) を必要としている。我々が居住している世界の慈悲とはいわれないが、将来が一定の予測通りに進行するという

確実性を求めているのである。このような確実性のイメージが内的な欲求不満あるいは外的な攻撃によって崩壊した場合、確実性 (certainty) を保証する別の寄り所を求めるのである。カルトやセクトに入信することは、このニーズを満たす方法の1つである。失われたものの復活を約束する文字通りの組織を必要とする者は、従来の伝統的体制が改められた新しいセクト、あるいは、この段階においてはまだ失望感をあたえてはいない、新種の信仰という形式のカルトの中に、そのニーズを満たすのである。

文献

- Baron S: A Social and Religious History of the Jews. Vol II. New York, Columbia University, 1952
- Betz O: Dead Sea scrolls, in The Interpreters Dictionary of the Bible. Edited by Buttrick GA. Nashville, TN, Abingdon, 1962
- Bickerman E: From Ezra to the Last of the Maccabees. New York, Schocken Books, 1947
- Broshi M: Beware the wiles of the wanton woman. Biblical Archaeological Review IX(4):54-56, 1983
- Burrows M: The Dead Sea Scrolls. New York, Viking, 1954
- Chasseguet-Smirgel J: The Ego Ideal. New York, WW Norton, 1985
- Farmer WR Essenes, in The Interpreters Dictionary of the Bible. Edited by Buttrick GA. Nashville, TN, Abingdon, 1962
- Gaster TH (trans): The Dead Sea Scriptures. Garden City, NY, Anchor Books, 1964
- Josephus: The Jewish War. Translated by Williamson GA. Harmondsworth, Middlesex, Penguin Books, 1959
- Licht J: Dead Sea sect, in Encyclopedia Judaica. Edited by Roth C, Wigoder G. Jerusalem, Encyclopedia Judaica Press, 1972

第7章 治療者と家族に対する助言

序文で述べたように、本委員会が今回の研究を実施したのは、新興のカルトの発生の増加に対してはびこる不安と、これらのカルトの若年者への影響に対する心配を配慮したからである。親元を去り、親を無視したり軽蔑するようになった子供をもつ場合、親は子供に対して激しい怒りと衝動を表している。また、こうした子供たちの適切な保護についても訴えている。カルトに入信した者は「洗脳」 ("brain-washed") されている、と一般に考えられているため、信者を連れだし (kidnapping)、「脱会」 ("deprogramming") を試みても、感情的なわだかまりが残る結果となる。また、脱会についての法律上の規定もはっきりと定められていない。一部の判事

は、信者の強制的な脱出 (seizure) を認めるが、信者がカルトに残留する権利を認める判事もいる。実際、脱会を促した場合には、カルト側が逆に誘拐罪で告訴するケースもある。いずれにしても、「脱会のカウンセリング」 ("exit counseling") は、厳しいものであり、信者の意志によるものではなく、あるいは非合法的手段であることもあり、このカウンセリングを行なうことが、親や子供にとって有益であるかどうかについて、十分検討する必要がある。

信者が精神病であることが明らかな場合、脱会、あるいは強制的治療の中でもよりやわらかな方法などが適当であると考えられる。このような場合、法律的な許可を得ることができ、親権あるいは保護者の権利を行使することが可能である。前述したが、精神病はカルト信者ではそう多くはない。というのは精神病者は従順な信者にはなれない場合が多く、信者としてはあまり歓迎されない。同様に、カルト指導者も誇大的に見えることもあるが、精神病者であることはまれである。もしカリスマ的な指導者の精神病の証拠が明らかな場合、あるいはカルト信者を自己破壊や殺人といった狂乱行為に誘導した場合、当局の介入もやむを得ないのである。子供の意志とは無関係に、子供たちをカルトから取り返した親たちを擁護する判決が下される場合がある。信者である子供の安全性が確保されていない場合にはこのような判断が下される場合がある。他方、グルが毎日ロールスロイスを手に入れたいと希望し、高位の正常な信者がグルの希望をかなえようとしている場合、違法行為が行なわれていない限り、法律が介入することはできないのであろうか？ 選択の自由が認められているのが我々の [アメリカの] 社会なのである。新聞や雑誌のカルトに関する記事は、偏向している可能性があることを十分理解しておく必要がある。すなわち、性的乱交、残虐行為による療法、強制、各種の不正行為等が行なわれている状況が誇張されている場合が多い。献身的で愛情豊かなカルトの指導者というのは、ニュース的価値がないのである。

洗脳 (Brainwashing) の問題

洗脳行為を訴えることは諦めてしまったのであろうか？ 洗脳という言葉をどのように定義するかによって決まる問題である。元来、「洗脳」とは戦時の捕虜に対して使われていた言葉である。捕虜として囚われの身にある者に対して残忍な行為を加え、同時に支配者の思想を吹き込むのである。これは稀であるけれども、もしカルト信者が勧誘される場合に、問題となるのは、家族や友人から強制的に隔離されて (forced isolation)、「捕虜」 ("captive") に近い状態で入信を強要され、カルトの教義や目標に同一化させられることなのである。洗脳が非常に安

易に行なわれるならば、重大な問題である。洗脳と関連して、集中的な広報活動、広告活動、豊富な資金を背景にした政治運動、伝道活動等にも十分な注意が必要である。ロンドン大学社会学部長を務める社会学者の Eileen Barker は、統一教会信者について包括的なアプローチによる社会学的研究を報告した(The Making of a Moonie: Choice or Brainwashing? Barker 1984)。Barker は、1年間にわたって信者らと共に生活した。Barker によれば、統一教会では洗脳を手段として入信を促してはいないとのことであった。身体的な拘束を加えているところを裏付ける証拠はなかった。また、食事制限や重労働によって、正常な行動が傷害されていることを裏付ける証拠もみつからなかった。Barker は、愛や配慮にみちたコミュニティの体験によって、個人的な信仰が育てられているとの感想を述べている。

公認されている宗教であっても、奇妙な宗教であっても、いずれの場合においても、早期の段階で教義を吹き込むこと (indoctrination) は、信者を獲得する最も重要な手段であることは間違いない。前述したように、確立された宗教的コミュニティの中で成長した子供の場合、カルトに入信する者はほとんどいない。宗教に入信 (affiliation) する場合、理性的な判断 (rational judgment) は無縁である。帰属への欲求 (a need to belong) を有している者が教義を吹き込まれれば、すぐに入信するのである。

入信の理由

今回の調査では、若者がカルトに入信する理由として、生活における空虚感が挙げられた。意識しているか、あるいは無意識であるかには関係なく、若者たちは、両親や社会からの断絶を感じているのである。通常、不安 (anxiety) や抑うつ状態 (depression) に陥っているが、症状の自覚には乏しい。成人の世界においては、くつろぎを感じられないのである。若者たちは自立することができないのではないかと不安に思う。自分を確実に世話してくれる優しい親や年上の兄等を探し求める。若者の周囲には、厳格で愛情に欠ける親や人生の支えを提供してくれない人々がいるが、これらの思いのままにならない人々の代わりとなる優しい存在を追求するようになるのである。このような若者たちは、同じような性質をもつ同胞で形成される安全で保護された環境 (safe protecting environment) を求めるのである。似たもの同士が集合して、外部の現実の社会 (outside world) と対立するのである。

このような若者の願望自体は、若年者に存在して当然であるといえる。また、これらの青年の願望自体が、重大な情緒障害を意味するわけではない。このような状態は、成長過程 (developmental process) の1つである。このプロセスを経て成長していくの

である。とくに思春期の若者 (adolescent) と若年成人 (young adult) に認められることであるが、誰でもこのような葛藤を経験するのである。成人に対する願望と同時に、子供時代に対する惜別の感情が混在しているのである。成長のプロセスについて取り上げる場合、思春期は一時的な期間であるが、その期間における青年と両親との隔たり (distance) が強調されるのである。この思春期において、青年は、あらゆる種類の独善的な主義主張に熱烈に没入し、家族以外の成人や友人、たとえば教師、コーチ、場合によっては、表面的ではあるが、映画スターやロックミュージシャンを理想化してあこがれるのである。

また、自分の行動や外見を仲間 (peer group) と同じようにしたいという願望も、若者に共通の傾向である。このような傾向は、食べ物、服装、美学、思想における一時的な流行 (fad) と等しい。発達理論の提唱者は、これら一連の行動が、ある種の実験 (experimentation) であると考えている。この実験は、多様な役割や同一化への試みであり、親元から離れたものではあるが、これは拡大された社会的保護的な範囲内において行なわれており、これらの青年の最終的な目標は個性的なアイデンティティを確立することなのである。

無力 (helpless) で依存的性格 (dependent) が強く、責任能力に欠ける (incompetent) 若者の場合、「規範的」な反抗 ("normative" rebellion) というものは選択肢に存在しないのである。自尊心の確立あるいは社会的存在としての経験が欠如している若者の場合、目標に向かって真剣に進んでいくことはできない；この時期の青年に特有のホルモン変化や過激な社会的実験的経験が原因となって、感情の混乱 (emotional chaos) に至るが、混沌とした感情に耐えるために必要な愛着的関係 (attachment) も形成されていない。この場合、究極的にはカルトによって報いがないとしても、青年にとってカルトは、魅力的であり、代用としての役割にはなる。これまでも述べてきたが、入信することによって、指導者 (mentor)、目標 (goal)、理想 (ideal) を手に入れることができる；衝動の抑制を手助けする指導者；帰属集団；達成する決められた日課；住む場所；入信したからといって、カルトが返礼を要求することはない。カルトに入信することにより、「社会心理的モラトリアム」 ("psychosocial moratorium") を認められ、幸運な場合には、この猶予期間に真の成長を遂げる (true developmental progress) ことができるケースもある。

残念ながら、このようなケースは例外的である。通常、カルトの圧力によって人格の統合が妨害されるケースがほとんどである。カルトが加える圧力は、幼児化 (infantilism) を促進するものであり、個性化 (individuality) や自立 (independence) を抑制するも

のである。したがって、若年者をカルトに駆り立てる根本的な原因を解決するのではなく、カルトはこのような苦悩の状態を悪化させるのである。たとえば、入信した若者が、孤独や抑うつから解放され、攻撃、乱用、自己破壊的衝動等の行動を制御することができるようになったとしても、これらが達成されるのは、若者たちがカルト集団内に存在している限りにおいてなのである。

治療者とカルト信者の家族への助言

カルト信者の親から、相談の要請を受ける場合がおそらくあると思うが、このような場合、まず我々がとるべき態度は、親のニーズ (needs) へと向けられることとなる。非常に難しいことではあるが、状況を慎重にあわてずに把握することが最も重要である。このようにして、困惑している保護者が、客観的な評価ができるようになり、理性的に対応することも可能になるのである。最初にすべきことは、依頼者の話をよく聞くことである。この段階は、治療を求めている保護者の意図の明確化である。治療者は、事実を把握する前に、家族のせきたてる力に圧倒されて、意見を述べてはならない。また提供されるサービスが確実であると保証される前に、法律的論争や強制的な治療に関与してはならない。あらゆる場合において、判断を提供する前に、あらかじめカルトの信者と直接連絡を取ることが重要である。直接面接した上で、精神状態、責任能力、安全性等について、慎重に判断すべきである。間接的な情報や個人的な反応を元にして、このような手段をとらずに他の仕方で行動すれば、治療者としての専門的知識を乱用する (abuse) ことになるのである。

宗教的カルトについて、一般的な評価を下すことは可能であるが、信者という一人の個人にとっては、入信することは、多くの決定因子を伴う複雑なプロセスである。臨床医は多様な各種要因について検討しなければならない。こうすることにより、個々の症例について理解することができるのである。この場合、個人の人格や発達過程について検討すると同時に、特定のカルトの性質とその活動についても把握することが重要である。カルト信者の家族と信者の周囲の環境が及ぼす文化的影響についても考慮すべきである。

カルト信者を理解すること

親というものは、子供との連絡が途絶えることを非常に恐れているものである。治療者は、まず最初にこの事実について注意しなければならない。親に対しては、多数の若者が、比較的短期間の入信後には、カルトから去るといふ事情を説明しなければならない。入信した子供は、家族が子供に強制したり

子供を放置するのではなく理性的に行動し子供の意志を尊重しているということ、を理解できたならば、最終的には家庭に戻ってくるものであり、この点について治療者は親の理解を求めなければならないのである。この段階において、詳細な履歴について親から情報を入手するのである。親は、子供自身についての情報や関連した出来事などについて提供することが重要である。このように迅速な対応をとることによって、早まった短絡的な間違った緊急措置を講じることなく、不安がまずおさまるものである。臨床医に対して子供のことについて語ることにより、気持ちにゆとりができる。この時点で、親子関係や家庭内のストレス等の子供に関するより繊細で重大な問題についてアプローチするのである。

親の話すストーリーは、子供の思春期に発生した問題や失敗経験などにおそらく焦点づけられるようになる。話すことにより、おおくの思春期の若者は問題行動を起こすものだという事を再確認し、このような行動が必ずしも情動障害ではないことを再認識するのである。親がとくに外傷体験であると判断するような出来事はよく話し合わなければならない。また、社会病質的な履歴や違法行為、物質乱用を含む精神病の既往歴、精神科の治療歴についても検討されねばならない。特別な身体障害がある場合には、これについても述べる必要がある。

親は、家族内に発生した精神病や身体疾患についての情報を提供すべきである。潜在的な精神病について検討する場合、患者には直接質問しない内容を親に問う場合がある。子供の不安や抑うつ行動について気付いていたのか？あるいは子供の反抗心について気付いていたのか？子供は極度の怒りを表していたか？怒りを表している場合、非常に極端な怒りを表していたか？あるいは目立たないような方法で怒りを表していたか？子供は、家族や友人に対して身体的な暴力をふるっていたか？他者による虐待歴があったか？子供の全般的な人格の傾向についての情報を入手することは有用である。例えば、子供が攻撃的であるか受動的であるかについても知っておくことが必要である。

子供の社会的関係についても記録すべきである：どのような親子関係であったか？同胞は何名であるのか？何番目に生まれた子供であるか？家庭内における自分の位置について、子供はどのように感じていたか？同性および異性の友人との交流関係はどのようであったか？子供は恥ずかしがりやであったか？性的傾向はどうであったか？子供は他者に嫉妬心を抱いていたか？子供は不当に扱われていると感じていたか？子供は甘やかされていたか？あるいは正しく評価されていたか？

認知および知性の面での発達についての情報も重要である。例えば、学校での活動や成績（わかっている場合には特別な知的発達の遅延も含まれる）の

評価、授業態度、得意領域、趣味や課外活動等のとくに積極的に取り組んでいる分野についての情報が含まれる。子供は野心家であるか、それとも覇気がないか？ 独立心が強いのか、あるいは従属的か？ 道徳や思想の発達的な評価としては、子供の宗教的背景、宗教、政治、世界事情に対する態度等が含まれる。

兄弟姉妹、可能な場合には本人とも面接を行なうことが、一層の理解を深める。親の陳述と直接的な臨床観察を比較することは特に重要である。

カルトを理解すること

カルトについては、とりうるあらゆる視点から分析すべきである。カルトの教義や活動について正確な情報を確保することは特に重要である。しかし、当然のことであるが、カルトについての親の見立てと個々の信者の見立ては、それぞれに歪んでいる可能性があり、すくなくとも特異的である。治療的アプローチを計画する場合、このことについて認識することが重要である。カルト集団についての情報は、親、信者の若者本人、その他の信者、カルト集団が発行している出版物、外部の専門家による研究報告等から得られる。さらに、カルト集団を直接訪問することも重要である。カルトについて評価することの目的は、カルト信者について可能な限り多くの側面から把握することである。この場合には、指導者、他の信者、信仰、生活様式についても評価する。

信者の勧誘の実態やその方法についての情報から、本来の意味における「洗脳」が行なわれているかどうかを判断することが可能である。例えば、魅惑的な「愛情爆撃」("love bombing")、強制的拘禁、身体的あるいは精神的なテロリズム(＝威嚇)等の方法が実際に行なわれているかどうかを判断する。

信者に関するデータには、人口学的資料や個人的な観察データが含まれる。信者はステレオタイプな行動をとっているように見えるか？ メンバーは紋切り型であるか、あるいは硬い微笑を浮かべているか？ 決まり切った意見を述べているか、あるいは意見を押し付けているか？ 知性的な柔軟性や感情的な深みのゆとりが認められるか？ 信者には何が要求されているか？ 信者の希望があれば自由に脱会することができるか？ 脱会する信者の割合は？ 信者である期間はどれくらいか？ カルト集団は絶対服従を要求するか？ 黙従しない場合、どのような処置がとられるのか？ 信者は辱めを受けているのか、あるいは強制的に恥ずかしい行為をさせられているのか？ 威嚇されているか？ 身体的あるいは精神的に虐待されているか？ 性的虐待を受けているか？ 満足な食事が与えられているか？ 十分な世話を受けているか？ 睡眠時間は足りているか？ 作業のスケジュールは厳しすぎないか？ カルト内部に

おける人間関係はどのようなものであるか？ 信者を幼児化して成熟を妨げていないか？ 性的関係を結ぶことに熱心であるか？ 性的関係が認められる場合、カルトはパートナーの選択や性的関係の質にどの程度の干渉を行なうのか？ 子供が生まれた場合、あるいは子供が親と共にカルトに入ってきた場合、親が世話をすることができるのか、あるいはカルト集団が子供の世話をするのか？ 子供に暴力が加えられているか、あるいは子供が虐待されているのか？ 子供の教育はどのように行なわれているのか？

グルについての質問では、精神状態や人格的な統合に関する評価が含まれる。カルトの指導者は、お金に対してどのような態度をとっているか？ 信者は、カルト集団のための募金活動に参加するように求められているか？ 信者になった場合、個人的な財産や所有物はカルト集団に寄付するように求められているか？ カルト集団またはそのグルが訴訟を起こされているか？ 訴訟を起こされている場合、どのような問題で裁判が行なわれているか、また、その結果はどのようなになっているか？

家族を理解すること

最後に、親とその家族について検討しなければならない。面接の過程を通して、親についての情報は入手されていくのである。この段階では、食い違っている事柄 (gap) について、その修復を行なうのである。個々の親はどのような性質か？ 内省的か、あるいは自分とは無関係なことでも説明を要求するタイプか？ 目下の状況を理解することを重要視するか、あるいは積極的な「解決」の必要性を主張しているか？ 行動をとることを要請している場合、それは子供の問題行動に対する罪悪感あるいは怒りによるものか、あるいは子供から拒絶されたという感情によるものか？ 親は自己批判的であるか、独善的であるか？ 子供がカルトを選択したことをどのように理解しているのか？ 家庭の社会的背景および経済的背景はどのようなものであるか？ 家庭生活はどのようにして築かれているのか？ 子供には何が期待されているのか？ 期待していることをどのようにして伝えているのか？ 親は過度に厳格であるか、あるいは過度に放任主義であるか？ 親はどのような道徳的背景あるいは宗教的背景を持っているのか？ どのような宗教的儀式が守られているのか？ このような宗教的儀式に対して親はどのような態度をとっているのか？ 親はどのような行動規範および社会的価値観をもっているのか？ どのようにしてこの価値観が実行されているのか？ 家庭の方針を子供が受け入れ、それを実行しているか？ カルトに対して反対を表明したか？ 反対意見を子供が受け入れたか？ あるいは一層反発したか？ 親